

河口湖湖上祭、吉田の火祭りに参加して

前田昌子 講師

去る8月、富士吉田地区で行われた2つのお祭りに参加しました。1つ目は8月5日に行われた「河口湖湖上祭」です。湖上祭は元来、提灯を船につけ湖心に漕ぎ出し世のけがれ一切を水に流すという、旧暦の6月30日に行われていた河川浅間神社の祭事だったとのこと。それを大正6年、船に花火を乗せ湖上から打ち上げたのが現在の湖上祭の原型となったそうです(湖上祭プログラムより)。昭和大学も数年前から花火を提供していることもあり、小口理事長をはじめ富士吉田校舎職員の皆さんと鑑賞に行きました。当日は朝からあいにくの空模様でしたが、予定どおり打ち上げとなり、湖上に広がる半円形の花火の美しさ、打ちあがった花火が湖面に映り一層明るくなるなど、一つ一つの花火に感嘆の声があがりました。昭和大学の花火は大学カラーの青を基調としたシックな花火。締めくくりには湖上祭でも一二を争う大きい花火が上がり、終了したときには一同から自然と拍手が起こりました。2つ目は8月26、27日に行われた「吉田の火祭り」です。長野県の諏訪大社の御柱祭、秋田県のなまはげと並ぶ日本三奇祭として知られています。夏の富士山の山び

まいとして行われる北口本宮富士浅間神社と諏訪神社両社のお祭りです。26日は諏訪神社から出発した明神神輿と、真っ赤な富士山の形をした御山神輿が吉田の町をめぐり、その後、金鳥居から上宿交差点にいたる沿道に一言に大松明が立ち並びます。昭和大学からも大松明を出しており、小口理事長により点火されました。約3mの松明がところせましと燃え盛り、夕方になりやや肌寒かった吉田の町が一気に熱気に包まれました。世界文化遺産に登録された年に関連した伝統的行事に参加できたことは富士吉田に働く者ならではの経験でした。



富士登山競走救護ランナーをつとめて

弓桁亮介 講師



富士登山競走は日本一過酷な山岳レースであり、スタートからゴールまでの道のりに平坦な道や下りはほとんどなく、ひたすら上り続けます。また、コースの半分以上は舗装されていない山道であり、走れば走るほど標高が上がり酸素が薄くなるため、ランナーたちを非常に苦しめます。今回で2回目の救護ランナー挑戦となりましたが、ぶっつけ本番だった前回とは違い、少しだけ余裕をもって走ることができました。ゴールした後に五合目から見下ろす景色と完走した達成感、やはり格別なものでした。今回は救護をしたランナーの方から、メディカルスタッフの存在が非常に心強いという言葉をいただき、本当に嬉しく思いました。同時に、スポーツイベントを陰で支える救護体制の重要性を感じました。2020年の東京オリンピック開催も決まり、本学の附属病院がある江東・豊洲エリアは多くの競技会場となります。7年後、世界中の興奮と感動を「昭和のチカラ」で少しでも支えることができたらどんなに素晴らしいか。そんな思いがあふれる救護参加でした。

ボランティア活動「ありんこ祭り」を通じて

薬学部 廣田礼奈 (大宮開成高等学校出身)

今回、初めてボランティア活動に志願しました。障害福祉サービス事業所「ありんこ」主催の「ありんこ祭り2013」において、障がい者の方々の手伝いをするという内容でしたが、以前私は初年次体験実習で富士吉田市内にある社会福祉法人の施設に行った経験があったため、密かに自信がありました。しかし、実際の場に直面すると、何を話せばよいかかわからず、自分から声をかけるというのを躊躇してしまいました。同時に、まだまだわからないことがあることを実感しました。しかし、利用者さんが家族と話しているとき、ステージで手話の発表をしているとき、抽選で景品をもらえたとき、本当に些細なことや私たちが楽しい、うれしいと思えることにに対して、利用者さんも同じように心から喜びを表現するということが改めて気づきました。そして、私はそのときに見せてくれる利用者さんの笑顔が本当に大好きです。障がいを持つ方だから、というように考えるのではなく、自分と同じ目線で接することが重要なのだと思っています。



最後に、今回のボランティアで改めて気づいたことがたくさんあり、貴重な体験をさせていただくことにに対し、ありんこの皆さまに感謝申し上げます。

「吉田のうまいもの祭りin下吉田」ボランティアに参加して

薬学部 望月優貴子 (学習院女子高等学校出身)

10月20日に「吉田のうまいもの祭りin下吉田」のボランティアに参加しました。メイン会場の山梨中央銀行吉田支店では、全国各地の飲食店がブースを構えていました。私が担当したのは愛知県蒲郡から来たうどんの店です。主に盛り付けを担当しました。お客さんと接することはあまりありませんでしたが、お店のスタッフの方々による他のお店の方々に対する気遣いや配慮を学ぶことができました。例えば、隣のお店のスタッフが少ないときは、合間を見て手伝っていたり、他のお店にも自分たちのうどんを知ってもらおうと配っていたり、ボランティアの私たちに対して「疲れていない?」「今、休憩に入ってもいいよ。」と何度も気を使ってくれました。特に、当日は雨の影響で客足も少なかったのですが、できるかぎり多くのお客さんに知っていただきたいと、傘をさしながらうどんのスープを配っている姿がとても印象的でした。自身の目的のみにとらわれず、他者への配慮を忘れない態度は、チームで働いていくうえには不可欠なことだということを学習していますが、今回はまさにそれを実感することができました。



「Mt.Fuji河口湖ジャズフェスティバル」ボランティアに参加して

歯学部 下野史菜子 (湘南白百合学園高等学校出身)

11月3日、河口湖円形ホールにて開催された「第五回Mt.Fuji河口湖ジャズフェスティバル」に、ボランティアとして参加しました。当日はまさに紅葉真っ盛り、赤や黄、オレンジに色づいた山々や、麓に佇む河口湖を眺めることができ、清々しい気候にも恵まれました。活動内容は、会場受付や飲み物販売、出演者に贈られる約200食分の食事の盛り付けでした。不安こそあったものの、ボランティアの本質は楽しむこと。りんごやみかんなどの果物が振る舞われたり、山梨県民ならではのお話で盛り上げてくださったり、地元の方々がなにより温かかったです。何気ない心遣いが持つぬくもりは、会場にも溢れて心地よい雰囲気を作り出していました。ボランティア精神とは、人と人との関わりを大切に、自分の「精一杯」を発揮すること。今後も機会があればボランティアに参加し、様々な体験を吸収しようと思います。



りでなく、記憶を呼び覚ます一助となりました幸いです。次号の発刊は新年度となりますが、今後とも「白樺・百合」をよろしくお願ひいたします。【訂正】前月号「富士山 世界遺産に」の記事において以下の誤りがありました。ここに訂正してお詫び申し上げます。誤「旧戸川家住宅」→正「旧外川家住宅」 編集委員 高田中成

編集後記 おかげさまで「白樺・百合」は今号、発刊から区切りの第20号となりました。後期の行事を網羅するため通常の4ページから6ページに増やし、その各々を詳しくしようと試みました。学生主催による一年生最後のイベント「クリスマスパーティー」はまだ記憶に新しいものの、夏期休暇直後の初年次体験実習や学生が新たに企画・実行した10月末日のハロウィンパーティーなどは記憶の彼方でしょうか。記事や写真をご覧の皆さまにとりまして、吉田キャンパスライフをご想像いただくほか

白樺百合

昭和大学
富士吉田キャンパスだより
第20号 2013.12.17発行

発行責任者 富士吉田教育部長 小出良平
編集責任者 富士吉田教育部広報委員長 倉田知光
〒403-0005 山梨県富士吉田市上吉田 4562
TEL 0555-22-4403



歯学部 稲本香織 (常総学院高等学校出身) 撮影

昭和大学で学ぶ

富士吉田教育部倫理学担当 教授 田村京子



医系総合大学で学生は何を学ぶのだろうか。昭和大学で倫理学を講じながら、本学の医療を中心とするさまざまな分野の先生方との出会いのなかで考えたことを書いてみよう。学生が学ぶのはまず専門的知識である。医療系の職種は国家資格であり、その資格をもった人しか医療を行ってはならないのだから、その任を果たすための専門的な知識・技能・態度を学ばなくてはならないことは言うまでもない。それに加えて大学という学問の府で学ぶのは、知ることの喜びであり、究極的には自らの無知を知ることではないだろうか。昭和大学1年次の多彩なカリキュラムはそのためのものだ。学生には新しい知識を得ることだけでなく、自分が想定していたのとは異なる事実に出会うこと、自分が信じていたことが実は思い込みすぎなかったのだと知ること、想像もできなかった別の捉え方や考え方があるのだと知ること、そういう知的な体験を存分に味わってほしい。自分の無知を自覚するとき、世界が広がり、すがすがしい解放感を覚えるものである。また1年次の学生は寮で、自分とは感じ方や考え方の異なる人々と暮らすことになる。これまで全く異なる環境で生きてきた他の仲間と出会うなかで、自分とは別の感じ方や考え方を知り、相手の気持ちに思いを馳せ、分かり合える喜びを知ると同時に、相手の気持ちを想像することの難しさを思い知らされ、関係づくりに苦悩し、揺れ動く自分の心のわからなさにも愕然とする。寮は自分を知り、自分を育てていくことのできる場所だ。チーム医療は、それぞれの医療従事者が自分とは異なる職種の人びとの意見を聴き、多角的に一人の患者さんへ医療を提供するものだろう。医療が「慰めと癒し」の術であるなら、医療従事者には人間についての深い洞察力が求められるはずだ。さまざま医療職の人びとが相互に異なる視座から患者さんに最善の医療を提供しようとするのだから、患者さんや家族を通して人の心身の複雑さを知ることになるのではないだろうか。人には大胆さと繊細さ、強さと弱さ、優しさと厳しさ、悲しさと喜び、欲望と謙虚さ、怒りと諦念、そしてどこまでいっても捉えることができない未知な部分があるということを感じ取るのだろう。そして、人が在ることの不可思議さや神秘に思い至るのではないだろうか。こうした人間の捉え難さに対する感性を磨くことは、実は自分の無知を知ることと通底する。昭和大学は、昭和大学でしか体験できないこと、学べないことをたくさん用意している。一年次のカリキュラムと寮生活はその好例だ。その豊かさを私たち職員は心から誇りに思っている。

広報誌名称について

全寮制を特徴とする富士吉田校舎学生寮は「白樺寮(男子寮)」「百合寮(女子寮)」の二寮からスタートしました。「赤松寮」「すみれ寮」を加えて四寮となった現在も、白樺・百合という名称は受け継がれています。この名を冠した「白樺・百合」という広報誌の名称には、過去・現在・未来の学生たちが日ごとに成長をとげて前進しつつも、常に初心を忘れず、伝統を受け継いでくれることへの願いが込められています。

大学では学生の国際交流を推進するため、海外実習・研修補助制度を設けて積極的に支援しています。



初年次体験実習



病院実習

病院実習

保健医療学部看護学科 小林菜々 (神奈川県立厚木東高等学校出身)

初年次体験実習は9月2日から20日にかけて行われ、そのうち1日が病院実習でした。4学部混合の5人でグループを組み、医局・薬局・病棟・リハビリテーションセンターで体験実習を行いました。

実際の現場に立つことで、今までは患者として、あるいは第三者的な視点でしか見えていなかった医療の世界を、初めて医療者という立場から考えることができました。また、ここでの学びは、「たわいのない会話」がどれだけ大切かということです。たわいのない会話は、日常の些細な出来事や、患者さんの趣味などを話すことで、その場を和やかな雰囲気にするすることができます。これは、患者さんにリラックス効果をもたらすことはもちろんですが、医療者にとっても、治療方針を考えていくうえで重要な情報源となります。例えば、患者さんの趣味を取り入れたリハビリを行うことや、患者さんの性格に合ったケアが可能になるなど、より良いサービスが提供できるようになります。そこで私たちは、単に知識や技術を身につけるだけでなく、非言語的なものも含めたコミュニケーション能力が不可欠であることをあらためて実感しました。

初めての实習は、不安や戸惑いも多々ありましたが、私たちを快く受け入れてくださった患者さん、病院のスタッフの方々や昭和大学の先生方の丁寧なご指導のもと、今回の実習を有意義なものにすることができました。この場をお借りして深くお礼申し上げます。



学部実習

救急法 BLS

薬学部 松田佳奈子 (日本大学藤沢高等学校出身)

初年次体験実習期間の1日を使って、救急法実習と心肺蘇生実習を行いました。私は以前、目の前で人が倒れた状況に遭遇したことが数回あります。そのときはまだ幼く知識もなかったため、何もできなかったことに悔しさを覚えました。この経験から、心肺蘇生をはじめとした救急法に強い関心を持っていたため、より一層気を引き締めて実習に臨みました。

救急法実習では、出血を伴う怪我や骨折などの応急処置を三角巾とガーゼを用いて行う方法を、主に学びました。また、毛布を使って傷病者を運ぶ方法も教えていただきました。

心肺蘇生実習では、心肺蘇生の一連の流れや、窒息をした傷病者に対する応急処置の仕方を主に学びました。実際に傷病者の発見から救急車が来るまでを想定し、救急車の平均到着時間の間を班員と協力して、絶えず心肺蘇生を行うといった実践に近い実習内容でした。また、窒息に対する応急処置も練習しました。

救急法実習も心肺蘇生実習も一人だけで行うことは難しく、多くの人の協力が必要です。チームワークの大切さを一層強く感じました。今までは、こうした救命行為に踏み切る自信がありませんでしたが、これからは傷病者に対して率先して手当てや心肺蘇生を行いたいと思えるほどの自信がつかしました。



BLS講習 救急法講習



施設実習

現場でふれた多種多様なコミュニケーションとその重要性

保健医療学部看護学科 中島千尋 (神奈川県立麻溝台高等学校出身)

私が初年次体験実習で実習を行った先は、障がいを抱えた方が将来、自立して生活・就職ができるようになるための訓練施設でした。そこでは自分の心情を言葉にすることや話すということが困難なために、うまくコミュニケーションをとれない利用者の方が多くいらっしゃいました。

初めは不慣れな環境と利用者さんと接することに戸惑いを感じてしまい、積極的にコミュニケーションをとることができませんでした。しかし、スタッフの方々の対応の仕方を見たり、自身で利用者さんの視点にたつて気持ちを考えようとしていたりするうちに自分なりの接し方が見つかったように思います。それは「コミュニケーションの手段は無量大」で「気持ちは相互の伝えたい、受け取りたいという想いがあれば通じる」ということ。施設長さんからも「相手と接するときは自分のものさしではなく、相手のものさしに合わせて考える」ということが大切であると教えていただきました。つまり、「障がいを一つの個性」と捉えて、同じ視点で生きることが重要なのです。

まだまだ施設のスタッフの皆さんのような自然な対応はできませんが、ここで学んだことを日常生活に活かしていきたいと思っています。お世話になった皆さま、貴重な時間をくださり感謝申し上げます。

施設実習



ポートランド州立大学サマープログラム

7月31日(水)~8月26日(月)の期間、アメリカオレゴン州にあるポートランド州立大学において、サマープログラムが行われました。

学生たちは、現地の学生へのインタビューやそれを基礎資料にしたプレゼンテーションなどの実践的な学習のほか、医療施設見学やラフティングなどのアクティビティを経験しました。熱心に指導して下さる教員の方々やスケジュール全般をサポートしてくれる職員の方々のご尽力により、プログラムは円滑に

進行しました。

学生たちは、富士吉田校舎で過ごしているときよりも精悍な雰囲気でした。コミュニケーションをとるために、話す相手をよく見ること、および相手に伝わるように話すことが必然である状況が、そうさせるのだと感じました。同様に、私も神経を研ぎ澄ませてコミュニケーションをとることを経験し、自らを振り返る機会となりました。

事務課 小林達彦



サマープログラム

薬学部 井出百合子 (東京成徳大学高等学校出身)

今回私がこのサマープログラムに参加しようと思ったきっかけは、中学三年生のときに三か月間ニュージーランドに語学留学した経験があり、もう一度、海外で英語に触れたいと思ったことです。また、現地でのホームステイ、アクティビティや医療施設見学という活動内容に興味を持ち、参加することを決めました。

ポートランドでの三週間は本当にあっという間で、毎日が新鮮で刺激的でした。例えば、授業ではPSU(ポートランド州立大学)の学生にインタビューを行い、日本の学生と比較する観点から、英語を学びながらアメリカの文化を学ぶことができました。最終日には、授業で学んだことや学生へのインタビューを基にプレゼンテーションを行いました。テーマは「PSUの学生と昭和大学の学生の違い」についてです。PSUの学生は年齢が様々であり、結婚している人や子供がいる人が通っていたり、学費を自身がローンを利用して工面していたり、興味深

い点がたくさんありました。

二週間のホームステイの後、学生寮に入ってから自由時間がたっぷりあったので、ミュージカルを観に行ったり、動物園に行ったり、市内観光をしたりしました。そのなかでも印象に残っているのは、現地のダンススタジオに行ったことです。自身でスタジオを探し、地図を利用して、現地の人に道を尋ねながら目的地へ行きました。英語を使うことを恥じず、積極的に現地の人に話しかけ、自ら行動することで貴重な体験をすることができました。このプログラムでの体験と人々との出会いは、私の夏の最高の思い出です。





クリスマスパーティーを開催して

クリスマスパーティー実行委員長 医学部 水野皓介 (千葉県立東葛飾高等学校出身)

紅葉も色づき終わり、寒さが骨身に凍みるころ、富士の裾野にひと足早いクリスマスが訪れました。世間では、クリスマスは12月25日ですが、昭和大学富士吉田キャンパスでは11月29日、30日。これは、本当のクリスマス前に退寮してしまい、退寮前には後期定期試験が行われるためです。そうです!クリスマスパーティーが終わったあとは試験勉強に励むため、私たちに浮かっている余裕はありません。

今年のクリスマスパーティーは、なるべく多くの学生が参加できるように、イベントの内容を充実させました。全員参加型の「リアルウォーリーを探せ」という企画やダンス、軽音楽、アカペラなど、総勢68の団体が主体的に参加してくれました。約一年間共に過ごした仲間が舞台の上で繰り広げるパフォーマンスは、心を熱くさせるものばかりでした。

しかし、順風満帆なことばかりではありませんでした。予算的な制限や引き継ぎ書からの情報が少ないことには、頭を悩ませました。何をやるにも手探りの状態で、やりたいことがあっても費用がかかるために断念したり、イベントなどの企画に問題が生じたりするたびに何度も何度も話し合いました。みんなが納得のいくものを作りたい、楽しんでくれるものを作りたいと取り組んできました。準備の段階は、私自身にとっては辛い日々の連続でしたが、クリスマスパーティーが終わってみんなが楽しんでくれているのを見ると、やってよかった、頑張ってたよかったと心から思うことができました。最高の仲間に出会えたこと、最後のイベントが最高のイベントになってくれたことを嬉しく思います。

最後に、寮生活もまもなく幕をおろしますが、吉田で過ごした大切な思い出を胸に新しい生活に取り組んでいこうと思います。

点灯式

中央委員長 医学部 平井 顕 (学習院高等科出身)

昨年度に引き続き、ゆり寮前の中庭にて、クリスマスパーティーに先駆けてイルミネーション点灯式が行われました。点灯式はMAS*による「星に願いを」の演奏から始まり、アカペラによる「楓」、「卒業写真」が披露され、どこよりも早くクリスマスの訪れを感じさせました。

その後、サンタクロースの衣装に身を包んだ田中一正学生部長から、点灯式に参加する副実行委員長、そして私の紹介があり、ついにイルミネーション点灯の時がやってきました。これはほとんどの学生には知られていなかったことですが、この日のために、クリスマスパーティー実行委員装飾部門の方々、深夜三時まで寮内で作業を行い、睡眠時間を削ってほかの学生のために頑張ってきたそうです。その甲斐あってか、MASによる「ルパン三世のテーマ」とともに点灯のレバーが倒されると、ゆり寮の六階から中庭にかけて造られたイルミネーションと中庭に設置されたイルミネーションが燦然と輝き、富士吉田キャンパスはまるでクリスマス前の街中のような幻想的な雰囲気に包まれました。

*学生による部活動「Medical All Stars Jazz Orchestra」の略



ハロウィンパーティー 伝統への第一歩

医学部 河野現紀 (秀明高等学校出身)

今回、昭和大学富士吉田校舎で一年生全体がかかわるものとしては初めて、学生主体のハロウィンパーティーを行いました。これまで夏休みが終わると、後期スタート以降クリスマスパーティーまでイベントがありませんでした。10月31日のハロウィンの日に仮装をしたいという声があり、夏休みの間に「学生主体のみんなが楽しめるハロウィンパーティーをやろう。」という嬉しい提案を受けました。この企画を立ち上げた当初は、本当に人が集まるのかという不安でいっぱいでしたが、当日は、約400人もの学生が参加し、パーティーは無事成功に終わりました。たくさんの友人に「本当に行ってよかった。すごく楽しかった。」とってもらえたことは今でも忘れられません。その日までの努力や苦勞が報われたような思いでした。

また、今回のパーティーでは、責任者として前に立つことや企画立案に難しさを感じ、困難に直面することもありましたが、学生スタッフのサポートの大切さを感じることができ自分自身の成長にもつながりました。

事務課の方々には夜遅くまで残っていただき、先生方からは、企画案の段階から今回のパーティーを実施に移せるよう多くのアドバイスを頂戴しました。学生主体といいながらも、多方面からのご支援があってこのような盛大なパーティーを開くことができました。

最後になりましたが、企画を主導してくれた歯学部伊崎雄太郎くん、今回のパーティーのために夜遅くまで練習してくれた学生の皆さん、参加してくれた学生の皆さん、事務課の方々、先生方、ボランティアスタッフの方々には本当に感謝しています。ありがとうございました。

